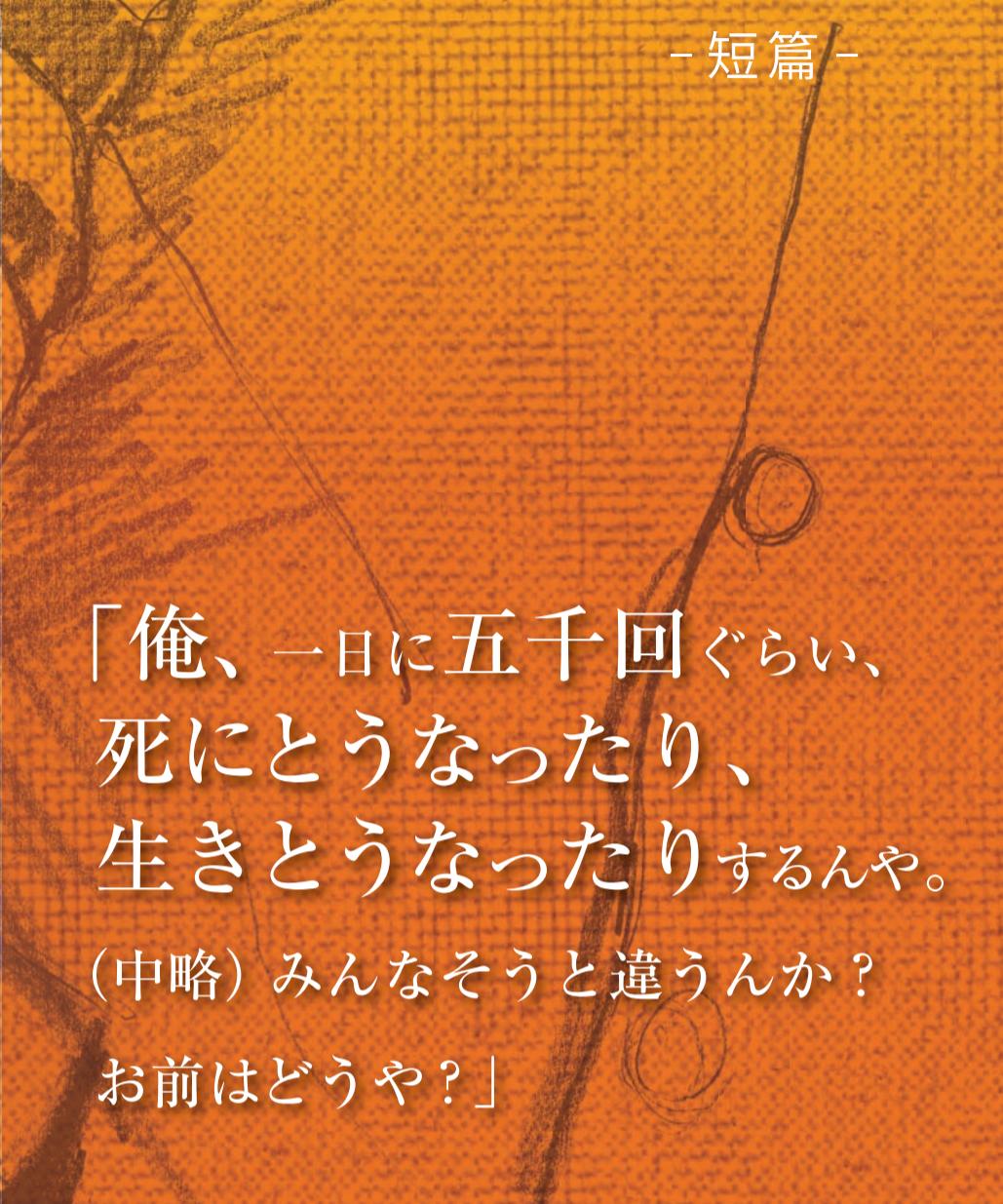


五千回の生死

- 短篇 -



「俺、一日に五千回ぐらい、死にとうなったり、生きとうなったりするんや。
(中略) みんなそうと違うんか?
お前はどうや?」



1987年、新潮社(『五千回の生死』収録)

Story

物語は主人公の回想から始まる。

14年前の大学2年の冬、死んだ父の遺品から年代物のオイルライターを発見した主人公は、友人に買い取ってもらうため、全ての所持金をはたいて友人宅を尋ねるが留守であった。一文無しのため、しうがなく徒歩で家路に向かっていたところ、自転車に乗った一人の男と出会い、ひょんなことから家まで送ってもらうことになる。

一晩の不思議な友情を描いた短編作品。

作品感想

とある晩に起きた数時間の出来事

主人公と自転車の男の会話は一見奇妙なようですが、二人の間に少しずつ友情に似た何かが芽生え、言葉も終えたあとは爽やかな気分になります。回を繋しながら話す主人公の口調が、標準語からいつの間にか関西弁へとカタリ替わっていくのも注目ポイントです。

『五千回の生死』収録作品

- 「トマトの話」(1981年、文學界 11月号)
- 「眉墨」(1981年、新潮 8月号)
- 「力」(1983年、文學界 11月号)
- 「五千回の生死」(1984年、文藝 1月号)
- 「アルコール兄弟」(1985年、別冊文藝春秋 新春号)
- 「復讐」(1986年、小説新潮 2月号)
- 「バケツの底」(1986年、文學界 2月号)
- 「紫頭巾」(1987年、新潮 1月号)
- 「昆明・円通寺街」(1987年、小説新潮 2月号)

()内初出

▶ 作品中に登場する「オイルライター」

「真鍮製で銀メッキが施してあるけど、使い込まれてメッキは殆どはげてる。でも、はげてるのがまたいいじゃないか。そのうえ、この形。無駄なところが何にもなくて、素朴過ぎるくらいだけど、これこそライターだっていう気品がある。」(『五千回の生死』より)



『五千回の生死』では、物語のキーモチーフとしてダンヒルのオイルライターが登場します。オイルライターとは、石油またはナフサ(揮発性の高い未精製のガソリン)を主成分とした燃料に火をつけるものです。適切な揮発機構を持つオイルライターは揮発機構内で気化した燃料を適度に含む空気が渦になってとどまるため、強風のなかでも高い着火性を持つのが特徴です。